

浄蔵

平安時代というのは、魑魅魍魎の蠢く、妖怪の徘徊する時代であり、怨霊の暴れまくる時代であった。

私はまえに「評判の妖怪通り」を紹介したが、これは京都ならではの歴史にあやかっの町づくりであって実に面白い。その「一条通り」を東に行くと、魔界・「一条戻り橋」がある。近くに安部清明神社と白峰神社がある。その「一条戻り橋」については、かつて私の書いたホームページがあるので、まずそれを紹介しておきたい。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/modoriba.pdf>

戻り橋の名前の起こりは、浄蔵の不思議な話しに端を発する。その他、浄蔵には不思議な話しがいくつもあるが、その代表的な逸話を紹介しよう。

京都の人なら「一条戻り橋」の話とともによく知っている話に「八坂の塔」の話がある。一度傾いた八坂の塔が浄蔵の呪力で元に戻ったという話である。しかし、「八坂の塔」の話を再度調べ始めて、まさか秦氏と密接な関係があるとは思ってもよらなかった。そこで、「八坂の塔」の話は秦氏の話から始めたいと思う。私は、今までにいろいろと秦氏のことを書いてきた。私のホームページで検索していただくと、秦氏の関連ページがわんさと出てくるが、そのうち重要なものをまず紹介しておきたい。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/yamatai06.pdf>

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/yamatai08.pdf>

秦氏は、わが国の歴史上まことに重要な氏族で、蘇我氏が横暴を極めていた頃、政治家として天皇の側近から身を引いてから、その一族は芸能面や技術面で大活躍をするのだが、桓武天皇が都（平安京）の建設をする頃にはすでに京都にいて、その土木建築技術を駆使して、平安京の建設に力を尽くすのである。日本で一番多い神社は「稲荷神社」だが、その発祥の地が秦氏の本拠地京都の伏見稲荷神社であり、この神社を創建したのが「秦伊呂具（秦鱗）」だ。京都の祇園にある八坂神社も、実際にその建設工事に携わったのは秦氏だと私は考えているが、「弥栄神社」も含めれば、「やさか神社」という名の神社は秦氏ゆかりのところに結構あるようだ。

平安京は秦氏とともに整備されていったと言って決して過言ではないが、その秦氏の菩提寺が現在の八坂庚申堂である。浄蔵は秦氏に頼まれてその八坂庚申堂の住職になっていたのである。浄蔵は僧でありながら、結婚して二人の子供があったが、ずっと晩年まで八坂

に住んでいた。八坂庚申堂は「八坂の塔」のすぐ脇にあるので、浄蔵は「八坂の塔」のお守りを天皇から命ぜられていたようだ。あるとき「八坂の塔」に多くの盗賊が忍び込んだが、浄蔵の念力でそれら盗賊は全く動けなくなって、役人に捕縛されたというはないが伝わっている。



[八坂界限](#)の景観の象徴となっている[法観寺（ほうかんじ）の五重塔（46m）](#)は、八坂の塔とも呼ばれている。飛鳥時代、592年（589年とも）に聖徳太子によるともいわれる。如意輪観音の夢告により、五重塔を建て仏舎利を納めたという。平安時代の頃、法観寺（ほうかんじ）は[宣寺](#)七カ寺の一つとして、官寺の東寺、西寺などに準ずる扱いを受けていた。（『延喜式』）

飛鳥時代、聖徳太子は、難波に四天王寺を建立するために、用材を山城愛宕郡に探し求めた。その時、この地が勝地として五重塔の宝塔を建て、仏舎利を安置し、法観寺（八坂寺）と称したという。（『山城州東山法観寺佛舎利塔記』）

平安時代の初め、この八坂の塔が西へ傾くということがあった。人々は凶事として恐れた。時の天皇は浄蔵を呼びつけ元通りにするのを命じた。当時、浄蔵は八坂の塔のとなりの庚申堂に住んでいた。この時代の僧侶は結婚は許されていなかったが、天皇がその法力が絶えるのをおそれ、浄蔵に対して結婚させて二男をもうけたということだ。64歳になっていた浄蔵は自分の法力をしばらく使っていなかったために、二人の子供を膝に乗せ、手始めとして鴨川の水を祈祷によって逆流させたとある。そして自分の法力が衰えていないことを知ると、八坂の塔に向かって祈りはじめた。天空にわかにくもり、一陣の風が吹いたかと思うと塔はゆらゆらと揺れ、元の形におさまったという。なんと不思議な話であるが、事實は、秦氏の技術陣が修築にあたる際に、その完成を祈って浄蔵が天台密教独特の儀式を行ったということではなかろうか。浄蔵の祈りと秦氏の建設技術がそれを可能にしたということであろう。まあいうなれば二人の合作である。

もうひとつ不思議な話がある。それは「葉二（はふたつ）」の笛の話だ。

朱雀門は、大極殿のある大内裏（だいだいり）に入る門であり、その外は俗なる世界、内は聖なる世界という、いうなれば世界をわける境の門である。その外は、俗なる世界であると同時に、それは邪悪の世界でもあり、恐ろしい鬼の出現する世界であった。だから、当初には、毎年、6月と12月の晦日に、武官百官が朱雀門に出てきて大祓の儀式を行ったのである。その大祓とは、聖なる大内裏から邪悪なるものを追い払う神事であり、いうなれば恐ろしい鬼を追い払う儀式であったのである。

平安京の起点は船岡山である。川の場合もそうであるが、京都では、船岡山から下流を見て左・右をいう。したがって、京都は、朱雀大路の東が左京、西が右京である。京都盆地を貫流する鴨川が関係しているからか、或いは運河としての堀川が関係しているからか、さらには 神仙苑が朱雀大路の東側に広がっているからなのかどうか、京の都は、左京が栄え、右京はそれほど栄えないままずっときた。右京を根城に朱雀門には鬼が棲んでいたらしい。

宇治の平等院に「葉二（はふたつ）」という名笛が残っている。元は朱雀門の鬼の笛であったところから、別名「朱雀門の鬼の笛」という。その笛を吹ける者がいなかったの、天皇の命により、浄蔵という笛の名手が、月のあかるい夜、朱雀門にきてその「葉二」を吹いた。 そうすると、朱雀門の上から、鬼が大きな声、でそれを褒め称えたという。

朱雀門の鬼は、「羅城門の鬼」や「一条戻り橋の鬼」などとは大分様子が違うようである。朱雀門の鬼は、名笛を持っていたり、名笛の奏でる音曲の良し悪しが判った。籟は、竹の笛の意。天が奏でる笛の音・天籟を聞くことができたし、地の奏でる笛の音・地籟を聞くことができた。人籟を聞くことも当然できたのであろう。ただ単に邪悪の世界に棲むだけでなく、聖なる世界をかいま見ることができたので、宇宙の真理というものを、そして又、当然、この夜の真理というものを会得していたのではなかろうか。

日本の鬼は、邪悪なるもののすべて、象徴的には、自然界の猛威を表しているといっても良いかも知れない。そういう言い方からすれば、聖なるもの、それは自然の恵みである。朱雀門の鬼は、邪悪なるものと聖なるものとの境に棲む。それは、邪悪であるとともに聖である。言うなれば、朱雀門の鬼は、自然との「共生」の、まさに象徴的存在であるのかも知れない。

浄蔵については、不思議な話しがいくつもあるが、何と言っても極め付きは菅原道真の怨霊の話である。

「北の天神縁起」などによると、菅原道真が死んで幾月も経たないある夏の夜、道真の靈魂が比叡山の僧坊に現れて、尊意（そんい。道真が仏教を学んだ師）に向かって、これから都に出没し怨みを復讐ではらす決意を述べ、邪魔をしないようお願いをしたのだそうだ。その後、道真の怨霊は暴れまくることになる。

その後数年経った908年10月、道真配流の首謀者のひとり藤原菅根（すがね）が54才でなくなったが、都では道真の怨霊の祟りだという噂が流れた。そして、翌年、道真の怨霊はいよいよ核心に迫っていく。

道真配流の張本人・藤原時平は、すでにこのとき病床にあったが、天竺渡来の妙薬も効き目がなく、また陰陽師（おんみょうし）の祈祷の効き目もなかったので、文章（もんじょう）博士・三善清行（きよゆき）は、自分の長男であり当時都でもっとも有名であったかの浄蔵（じょうぞう）に加持祈祷をさせることになった。そもそも道真と、浄蔵の父・三善清行（847年—919年）は長年、学者・官僚としてのライバルで、清行はむしろ道長を左遷した時平の側にいた人物でもあった。

延喜9年(909)、苦しむ時平の病の原因が道真の怨霊の仕業だとわかると、名だたる僧侶が時平の元に呼ばれ祈祷をおこないます。が、いっこうに効果はみられない。そこで、時平と親交が深く、調伏師としても世間の評判が高かった清行の子・浄蔵が呼ばれ加持祈祷を行うのである。父に連れられた浄蔵が畏まって祈祷すると、床に伏していた時平の左右の耳から青龍の頭があらわれ、道真の怨霊が無実の罪を述べるという妖しげな出来事が起こった。

ところが、4月4日のこと、清行が時平のところに見舞いに行くと、道真の霊は、時平の左右の耳から二匹の青竜となって現れ、次のように語りかけた。「無実の罪で配流となり、太宰府で死んだ私は、今や天帝（梵天ぼんてん・帝釈たいしゃく）の許可を得たので、怨敵に復讐を加えようと決断をした。なのにおまえの息子浄蔵は頻繁に時平を加持祈祷している。どうせ無駄なことだから、やめさせよ。」鬼神を操って冥界のことにも明るい清行は、即座に理解し、浄蔵に時平邸からの退出を命じ、自分みずからも退出したのだが、まもなく時平の命は絶えたという。そして道真の怨念の言葉に、一連の事態の真実を悟った清行・浄蔵親子はそれ以上、道真の怨霊を鎮めることをあきらめ、時平の屋敷を辞してしまうのである。

なお、菅原道真の怨霊と天神信仰のことについては、私が詳しく書いたものがあるので、是非、それを次をご覧ください。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/tenjinsin.pdf>

「一条戻橋」と「八坂の塔」の話や「葉二（はふたつ）」の笛の話は京都の人はよく知っている。また、祇園祭における山伏山は、浄蔵が怨霊調伏の修行のために山伏となって金峰山や大峰山に立て籠もった時の姿であるということも知っている人は少なくないと思う。





右手に苛高数珠（いらだかじゆず）を持ち、左手には斧、そして腰には法螺貝をつけた、まさに修験道者の勇ましい格好である。

この浄蔵の山伏姿の神像は、「宵山」で地元の町家で拝見できるので、是非、機会を見てご覧戴きたい。その関連のホームページをいくつかここに紹介しておきます。

<http://higasiyama-zakki.tea-nifty.com/blog/2010/07/post-2737.html>

http://www42.tok2.com/home/kansaikanko/shokoku/kyoto_gion_yoiyama/

<http://www.kyotokanko.com/gion/>

<http://d.hatena.ne.jp/narutakiso/20110717>

<http://little.moe-nifty.com/oneday/2009/07/index.html>

しかし、浄蔵が金峰山や大峰山で修行していたときの不思議な話については、京都人にもほとんど知られていない。そのことについて書いた書籍や論文がないかいろいろ調べてみたところ、二つの貴重な資料があった。一つは、学術論文であり、もう一つはマンガである。まず学術論文の方から紹介しよう。

安倍泰郎の『「熊野詣考」・・浄穢の境界を超え、<聖なるもの>へ至る経験の場』（国際日本文化研究センターシンポジウム）に、「浄蔵」が金峰山で修行していたときの話として、次のような不思議な話が紹介されている。すなわち、

『 金峰山や大峰山においても、髑髏がその世界の「聖なる」しるしであった。「諸山縁起」には、金峰山は仏生国の山であり、熊野権現はその鎮守であって、ともに髑髏が我が国に飛び来ったという縁起に加えて、役行者が七度転生してこの峯に修行し、始めの2、3生はその骸骨を留めており、それは巨大な身丈であるという伝承を記している。また、加えてやはり修験者として名高い「浄蔵」が同じく自身の前生の骸骨を金峰山の仙洞にて拝見し、その手より独鈷杵（どっこしよ）と剣を得るという奇怪な伝承をも記している。どの「髑髏」の眼中より生ずる樹が茂り盛んであったともいう。』・・・と。



「マンガ浄蔵」は、マンガとは言え、上田勝俊が並々ならぬ思いを持って書いたものであり、素晴らしい書籍である。金峯山で浄蔵が髑髏から独鈷杵（どっこしょ）を授かる伝承をよく調べられたと思うし、その意味するところを判りやすくしかも的確に描いておられる。ここではセリフだけ紹介しておこう。上田勝俊は、次のように書いている。すなわち、

『 あるとき浄蔵は・・・、葛城山で日々修行に励んでいた。ある夜のこと・・・、修行で疲れた身体を岩屋に横たえた。うとうとしていると・・・、「浄蔵！浄蔵！」
「あっ！」「浄蔵助けてくれ！わしをすくってくれ・・・。」「そなたは誰だ・・・」
「わしはお前だ・・・。金剛山にいる。動くことができないのだ。救ってくれ・・・。頼むぞ！」「あっ！」「ふ～、夢か・・・」「だが妙に気になる」「夜が明けたら金剛山に行ってみるか。」・・・金剛山山中・・・。「浄蔵！浄蔵！」「この声は昨夜の・・・」「うっ！頭がツッキンツッキン痛む！」「い・・・痛い！いったいどうしたのだ」・・・よろよろ、くらぐら・・・よろけて崖から落ちる・・・。「わ～っ！」『う～ん！』・・・上を見上げ・・・「あんな高いところから落ちたのか・・・。よくも生きていたものだ。」「・・・これも天のご加護か・・・」「ん・・・っ！尻の下に何かある」
「わっ！！これは人の骸（むくろ）だ！」「おやっ・・・この骸（むくろ）、手に独鈷（どっこ）を握っている。」「・・・ということは、この骸は僧侶かあるいは修験者・・・」「・・・」・・・浄蔵はポロポロと涙を出す・・・。「いったいどうしたのだ」「この骸を見ていたら妙にせつなくなつて涙が溢れてきた」「何やらわたくしに縁（えん）があるような予感がする」「この骸が生前何者のものであったか調べてみよう。」「・・・浄蔵は骸の前に座ると印を結び、金剛蔵王権現に陀羅尼（だらに）を唱え始めた・・・「オンバサラクシャアランジャ」「ウンソワカ・・・」「アランジャウンソワカ」「オンバサラクシャ・・・」『オンバサラクシャ』『オンバサラクシャ・・・』『オンアジャラソワカ』『オンソワカ』『オンバサラクシャ』『おおっ！』『浄蔵！よくきてくれた。長い間待ち続けたぞ・・・』「あ～っ！あなたは葛城山の岩屋でわたしの前に現れた方ですね。いったいあなたはどなたです？」「わしはお前だよ！」「えっ！あなたがわたし・・・。するとわたしは誰でしょう？」「わからぬか・・・。これがお前の昔の姿だ。」「えっ！」「では・・・わたしはあなたの生まれ変わりだと・・・」「うむ・・・」
「岩屋でわたしに救ってくれと言っていたのは、あれはどういう意味なんです？」「知つての通り人は皆この世にそれぞれ役目を持って生まれてくる。わしの役目は修験道を極め、世の人々を救済することだった。」「わしは自分の役割を全うするため、この金剛山で修行に励んでおった・・・」「修行の最中突然の頭痛に見舞われた。そして崖から落ちて、落命したのだ。」「役割を果たすこともなく・・・」「・・・あなたが命を落として果たせなかった役割を全うするためにわたしがこの世に生を受けたのですね・・・」「その通りだ。与えられた役割は全うしなければならない。」「なぜならそれぞれが自分の役割を果たしてこそ、この世の中がうまく回ってゆく。どれひとつ欠けてもこの世は微妙に

狂いが生じてくるのだ・・・」「かくいうわたしも何代目かの生まれ変わりなのだ。」

「そうなのですね・・・。やっと得心しました。」「先ほど突然頭痛に襲われたのも・・・、同じ魂を持っていたから・・・。」「そうだ・・・」「・・・お前の新しい魂にわずかに残っていた古い記憶が甦ったのだ。だからお前とこうして再会することができたのだ。」「だが間もなく古い記憶もわしも消える。わしが消えたなら加持にて骸の手のこの独鈷（どっこ）を受け取ってくれ。」「独鈷を・・・」「わしはこの独鈷を渡すためにこの寂しい谷底でお前と出会う時を待っていたのだ。」「そして今日ようやく会うことができた・・・」・・・浄蔵、感激の面持ち・・・「長かったが独鈷を渡せばこの世でのわしの役目も終わる。これで晴れて成仏できる。」「あっ！」「浄蔵とは頼むぞ。無事に役割を全うしてくれ。」「あ・・・あ、あ～、消えた・・・」「・・・浄蔵！何をしている。加持にてわが手の中の独鈷を受け取ってくれ！」「ウンソワカ・・・アランジャ」「オンソワカ」「オンアランジャソワカ」「オンバクラクシャ・・・」「ウンソワカ」「アランジャ」「オンバサラクシャ」「確かに独鈷は受け取りました」・・・そして、次の日、骸を丁重に葬り、経をあげた浄蔵は・・・、自らの役割を果たすことを強く決意すると、再び修行の場へ戻っていったのである。終わり！』・・・と。

「マンガ浄蔵」は、マンガとは言え、上田勝俊が並々ならぬ思いを持って書いたものであり、素晴らしい書籍である。金峯山で浄蔵が髑髏から独鈷杵（どっこしよ）を授かる伝承をよく調べられたと思う。その上田勝俊が浄蔵の人物像について簡潔明瞭に欠いているのでそれを紹介しておきたい。彼は次のように書いている。すなわち、

『 祇園祭で、先導する長刀鉾に連なる中に山伏山という鉾がある。山伏山は、山伏姿の人形を飾る珍しい鉾だ。この山伏の人形は浄蔵が金峰山や大峰山に入り修行をしている姿と伝わっている。浄蔵は大徳とも呼ばれ当時世に聞こえた天台宗の僧侶である。京都東山の法観寺に建つ塔を八坂の塔と京都人は親しみをもって呼んでいる。平安時代前期、この八坂の塔の傾きを天皇の依頼で祈って直したという話の主人公であり、堀川通りの一条に架かる橋の名を一条戻り橋と呼ばれてきているのもこの浄蔵の事績によるものである。さまざまな霊験が数多く語り継がれてきているが、特に注目すべき点はこの菅原道真が藤原時平の讒言により大宰府に左遷された事件にもおおいに関係がある。北野天神縁起絵巻には菅原道真が大宰府に配流される様子を始めとし、雷神となった菅原道真が冤罪を恨み当時の殿上人を震撼せしめた紫宸殿の落雷事件を巻中に盛り上げて描かれている。この絵の中で刀を振りかざして雷神を雷神を退散せしめる公家の姿が見えるのだが、この人物こそ道真を左遷に陥れた張本人である藤原時平である。時は流れ、左遷事件に深く係わった人々は道真の怨みをかけて次々と死亡させられていったが、時平にも死の影が忍び寄る。ある日、病の床に伏す時平は懇意にしている文章博士の三善清行を枕元に呼び息子である浄蔵に病を治す加持祈祷を頼む。

絵巻には病の床に伏す藤原時平の前で祈る浄蔵の姿がある。病身時平の両の耳穴からは二匹の青い蛇が現れており、青い蛇に化身した道真の霊が三善清行に語るには、あなたの息子浄蔵が祈祷するために私の願いが成就しない。願わくば浄蔵の祈祷を直ちにやめさせよ。かくして三善清行と浄蔵は、菅原道真の意を理解して静かにその場を立ち去ると、藤原時平は間もなく死亡したと伝えられている。その後も浄蔵は、貴人の病を祈祷で治すことなど数々の靈験を顕した。』

以上のとおり、天台密教の僧侶・浄蔵は偉大な人物であり、朝廷にとってなくてはならない人であったのである。特に将門の乱のときは天皇を中心とする朝廷は歴史上最大に危機に陥るのだが、それを救ったのは浄蔵である。そのことについて、私は詳しく書いたので、是非、次をじっくりご覧戴きたい。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/masakado.pdf>